

されている。たとえば、7405はアジサイであるが、ツェンペリはこれをガマズミ属とみなして、*Viburnum macrophyllum* αと同定した。この標本には、小泉源一(1925)とマック・クリントック(1954)による2枚の同定ラベル — *Hydrangea macrophylla* (Thunb.) DC. — が貼ってあった(図7)。注意すべきことは、採集地などのデータは、裏面の左上隅に記されていることである。このアジサイの標本には、小さく *E. Japonia*, Thunberg と記されている。ついでながら、ツェンペリの標本もリンネの標本も、歴史的に重要な標本は今では完全に撮影され、マイクロフィッシュとして市販されているので、写真ならどこでもみることができる。

参 考 文 献

- 上野 益三 (1973) 日本博物学史 平凡社 東京
 大井次三郎 (1953) 日本植物調査研究史 日本植物誌(17~20頁) 至文堂 東京
 北村 四郎 (1975) ケンペルの「日本植物記」について 植物と文化 №13, 2~13
 木村陽二郎 (1974) 日本自然史の成立 — 蘭学と本草学 — 中央公論社, 東京
 小泉 源一 (1932) 日本植物研究史略 植物分類, 地理 1: 1~10
 ——— (1936) 日本植物の研究 同上 5: 1~26
 清水 建美 (1976) Menzelの「日本植物誌」について 北陸の植物 23: 75~77
 Stafleu, F. A. (1971) *Linnaeus and the Linnaeans* Utrecht

長野県植物研究者伝 I

田中芳男抄伝

丸 山 利 雄

T. Maruyama: Biography of Sir Y. Tanaka

大井博士の「日本植物誌」(25頁)に日本の「明治時代の有名な植物学者、田代安定、田中芳男、矢田部良吉、松村任三、伊藤篤太郎、宮部金吾、牧野富太郎など」とあげられているその田中芳男は、長野県の出身者であるが、今は知らない人が多い。

田中芳男の名を学名にとどめたものには、次のようなものがある。

Tsusiophyllum tanakae Maxim. ハコネコマツツジ 1870年。 *Saussurea tanakae* Fr. et Sav. セイタカトウヒレン 1874年。 *Scutellaria tanakae* Fr. et Sav. コナミキ 1874年。
Tanakaea radicans Fr. et Sav. イワユキノシタ 1875年。 *Vicia tanakae* Fr. et Sav. オオバクサフジ 1875年。 *Cardamine tanakae* Fr. et Sav. マルバコンロンソウ 1875年。
Loranthus tanakae Fr. et Sav. ホザキヤドリギ 1876年。 *Stephanandra tanakae* Fr. et Sav.

カナウツギ 1876年。 *Euonymus tanakae* Maxim. コクテンギ 1887年。 *Cryptotaeniopsis tanakae* Fr. et Sav. イワセントウソウ 1902年。 *Arundinaria variegata* Makino var. *tanakae* Makino スダレヨシ 1912年。

田中芳男は、上記の植物の外タデスミレの発見者でもあり、オシャグジデンダの発見者、和名命名者でもある。田中芳男の略歴は、次のようである。

1838 (天保9年) 現在の飯田市並びにその付近の天領の管理者千村家の家臣で医者であった田中規定 (如水) の第5子 (3男) として、飯田・荒町 (旧飯田町役場の西隣り) に生まる。 (現在の飯田市の大部分は飯田藩領で天領ではなかった。)

1857 (安政5年) 19才、尾張に出て伊藤圭介の門に入り、医学、蘭学、博物学を学ぶ。

1860 (万延元年) 22才、帰郷。

1861 (文久元年) 23才 伊藤圭介に従って江戸に出、伊藤が幕府の審書調所に出仕し、田中も同所に勤務する。この頃、物産学を進め、殖産興業をもって国富をはかることに最も熱心であったのは、田中であるといわれている。

1866 (慶応2年) 28才、幕府万国博に正式参加。代表徳川昭武に従って万国博会場のフランスに出張を命じられる。 (『日本博物学史』には、11月出発とある。)

1867 (慶応3年) 29才、1月11日横浜発、2月29日マルセイユ着、3月7日パリ着、 (『IDE』103号による。)。万国博は、4月1日から11月3日まで、パリのシャン・ド・マルスで開かれ、田中芳男の採集製作した昆虫標本56箱も出品された。当時フランスは、世界のリンゴ (苹果) の生産国であった。

1868 (慶応4年) 30才、福井藩主松平春岳の江戸邸にあったアメリカ種のリンゴ (苹果) が従来のリンゴ (林檎) より優良であることを知り、それを接ぎ木して繁殖をはかる。

1870 (明治3年) 32才、太政官から編述を命ぜられた「皇国産物志」を提出する。

1871 (明治4年) 33才、文部省博物局天産部において、「羊歯分科名彙」を発行し、物産会 (日本における最初の博覧会) を企画し、開催する。

1872 (明治5年) 34才、「埵甘度爾列 (デ・カンドルレ) 氏植物自然分科表」を訳出。

1873 (明治6年) 35才、「小学校用動植物掛図」の動物の部の撰を担当。埃国博覧会に出席。「埃国博覧会紀要」を書く。

1874 (明治7年) 36才、「動物学初編」を訳出。

1876 (明治9年) 38才、米国における万国博に出席。

1877 (明治10年) 39才、この開成学校と東京医学校と合併して東京大学ができ、そこに理学部生物学科ができるまで、日本の博物学は文部省の博物局が中心となって発達してきたが、その中心指導者であった。

1881 (明治14年) 43才、東京に第2回国産物博覧会を開催。牧野富太郎 (19才) 上京し、

知過をうける。

1884 (明治17年) 46才, 畔田翠山 (紀州の人) の「水族誌」10巻 (水産動物735種記載) を1巻にまとめて再刊。

1885 (明治18年) 47才, 畔田翠山の「古名録」83巻 (わが国の歴史上, 生活上知られた金石, 動植物記載) を45巻にまとめて再刊。

1886 (明治19年) 48才, 「植物自然分科表」, 「有用植物図説」全7巻 (小野職感^{もとよし}と共著) を発行。

1888 (明治21年) 50才, 大蔵永常 (豊後の人) の「農稼肥培論」3巻を再刊。田中ビワ発見。このビワは長崎県の茂木ビワの種子をまいたものからあらわれた1品種で, 茂木ビワの実がやや長く甘味が多いのに比べ, 実が円く大きく, 水分が多く, その後千葉県で多く栽培された。(牧野富太郎著「我が思ひ出」による。)

1906 (明治39年) 68才, 3月11日東京学士会院で「貝の話」講演。

1915 (大正4年) 77才, 6月24日飯田小学校で5年生以上, 町長, 郡長等に講演。12月学術, 殖産に尽した功績により男爵を授けられる。

1916 (大正5年) 78才, 6月21日東京本郷・金助町の自宅で逝去。

墓は東京都台東区谷中墓地28号10側1971と飯田市伝馬町善勝寺とにあったが, 飯田のものは, 昭和22年大火後の境内整理のため, 今はない。

以上の外に, 1858 (安政5年) には伊藤圭介 (当時56才) とともに田中芳男 (当時東陽と記録されている) 外数名で数日間伊勢で植物採集した記録もあり, 内務権大書記官, 農務局長, 元老院議員, 貴族院議員, 帝国学士院会員などの官職にあったこともある。

今, 飯田市の中央を走る街路にリンゴ並木があって, 広く全国に知られている。そしてその栽培管理は飯田市内の東中学校の教育活動の一環として続けられていると聞く。街路樹としてこのような食用果実を植えること, それを義務制学校の教育活動の一環として世話をすることは, 極めて珍しいケースであり, 先人の深い思慮がしのばれる。この企画者は, 昭和22年飯田市大火災の復興事務局長であった本堂順一氏と, 当時市内飯田東中学校長であった松島八郎氏とによったものであったと聞く。

これら両氏が, この並木企画の際, 本市出身の田中芳男氏が明治の直前, ワリンゴ (林檎) に比べてセイヨウリンゴ (苹果) の果実の優秀性に着目して, それを広めようとした事実を承知していたか否かは筆者は知らない。しかし, わが国ではじめてセイヨウリンゴの優秀性に着目した有名な植物学者・殖産家の郷里の, しかもかつてその墓があったといわれる善勝寺から見おろせる街路にセイヨウリンゴの並木があって, 年々相当の収穫が福祉施設におくられて, 物質的にも精神的にも大きな成果をおさめていることを考えると, これらの企画は偶然のものであったのではないように思われる。

参 考 文 献

村沢武夫 (1962) 信濃人物誌 市村威人 (1937) 伊那史叢説第3篇